

# Jonas Reingold



英語版World of Adventures 20号より

WOAチームは「Adam & Eve」ヨーロッパ・ツアーの後半に、Jonasを捕まえて短いインタビューを行なった

Q: Jonas, KARMAKANICのツアーはどうでしたか？

Jonas Reingold (以下J): お金の面と音楽の面という二つの点から、興味深かったよ。僕にとっては、どれぐらいの人が観に来るかっていうのと、こういった音楽がライブという状況に合うかどうかを見てみるっていう、実験みたいなもので、その問いへの答えをいくつか得たよ。バンドのメンバーとプレイするのは凄く良かったね。それに、キーボード・プレイヤーのLale Larsonとは『今まで』一緒にプレイした事がなかったし。聞いたことがあるかもしれないけど、彼はモンスターみたいなプレイヤーなんだ。ZoltanとKrister (Jonsson: g.)とプレイするのは目新しいことではなかった。でもKristerとは以前一緒にジャズを演奏したから、こういう音楽を彼らと演るのは新しい経験だったよ。音楽面では、かなり上手くいったと思うし、かなりハッピーなんだ。お金の話をすれば、マイナスだった。たくさん損失を出してしまったけど、始める前からそうなるのはわかってたんだ。これは、これぐらいの赤字を出して、音楽面でまだ発展することができるだろうかっていうような事だったんだよ。こういうライブ・パフォーマンスをすることによって、観客を増やせるかもしれないからね。だから、僕にとって良い経験だったと思うよ。いいスタートだった。もうちょっとCDを売れば、何かできると思う。

Q: バンドのメンバーとのケミストリーはどうでしたか？

J: 僕らは皆同じバックグラウンドから来てるんだ。僕らは皆、ロックを演奏し始めたジャズ・プレイヤーで、僕は常に片足をロック・シーンに、もう片足をジャズ・シーンに突っ込んでいて、残りの連中も大体そうなんだよ。僕らは皆同じ言葉を話しているようなもので、音楽の面からいえば、こういう事をさっさとやるのを、とても簡単にするのさ。リハーサルが2日だけとか、

そういうね。同じバックグラウンドを持っている連中がいるのは良い事だと思う。Laleがキーボードで何か弾いたら、僕は彼が何をしようとしているのかハッキリわかるから、それに応える事ができる。皆が同じように反応できるんだよ。もし、メンバーが異なったバックグラウンド出身のバンドでプレイしたら、何が起るかわからないから、面白い。そういうバラバラのバックグラウンドから、良い音楽をつくり出す事ができるけど、リスクも大きいんだ。同じような方向性の人達と一緒に演る方が安全だけど、それが良い音楽を作るとは限らない。

Q: Regain Recordsとの契約は終了しましたよね。InsideOutへ動くというのは確かですか？

J: いいや、まだはっきり決まっていらないだ。彼らと話し合うつもりだよ。RegainからはフリーになったからKARMAKANICを好きなようにできるんだ。他の可能性も探っているんだよ。UniversalとかWarner Bros.とかからオファーは受けてないけど(笑)、プログレのジャンルで何か探すつもりなんだ。InsideOutかもしれないし、そうになったらクールだね…。

Q: KARMAKANICの今後はどうですか？

J: 1月から何曲か新曲を書いて、春には何かレコーディングするかもね。今は、僕の生活にもすごくいろんな事が起こっているんだ。

Q: スウェーデンの大学のレクター(=講師の一種)になるそうですね？

J: スウェーデンのSkaraでKristenとZoltanとギグをやったんだけど、この大学のコースが行なわれるのと同じ学校でやったんだ。トリオのギグをやって…、あ、違う、Zoltanじゃなくて、その地方出身のドラマーで、彼がギグのブッキングをしたんだ。ここで学校の全ての事に関する責任者に会って、彼女が僕に依頼してきたんだよ。僕が演奏したのを聴いたことがあったから、僕が誰か知っていて、大学のコース・デザインを

する人が誰か必要なんだとかいろいろ言って、それに応募してくれたら嬉しいと言ったんだ。僕は、うん、もしかしたらねとか考えていた。わからないよ。これはフルタイムの仕事だし、僕には自分のスタジオがあるし、THE FLOWER KINGSのメンバーだし、他にもプロジェクトが沢山あるから、全然できないだろうと思って、応募しなかったんだ。それで、7月の終わりに彼女が電話してきて、100人ぐらいの面接をしたけど、まだピッタリの人が見つからないって言うんだ。彼らはMalmoまで来て、僕と話がしたいということだった。それで、僕の所でミーティングをして、全ての条件を話し合っ、僕をフルタイムじゃなくて、40%のパートタイム(のスタッフ)にしたんだよ。これは僕にはパーフェクトだった。この仕事は僕に家族の面倒をみる時間をくれて、なおかつ全てのプロジェクトをするのに十分な時間も与えてくれる。だから受けたんだ。今、すごく楽しみにしているよ。何年もの間、ものすごく沢山のプロジェクトに関わって、自分のスタジオを経営して、自分の出版会社も経営して、ものすごく沢山のCDも出した。今、20代前半で、このビジネスがどう動いているか知りたい人達に、何かを返す準備ができたと思うんだ。このビジネスの4つの異なったエリアをカバーする予定だよ。80ポイントのコースで、それは学生が2年間フルタイムで勉強するという事なんだけど、サウンド・エンジニアリングと、ポップスの作曲と、ビジネス面と、ステージ・パフォーマンスについてカバーするんだ。サウンドとテクニックについては、サウンド・エンジニアリングからプロデューサーまで全部を扱って、ポップスの作曲は全てのスタイルを扱って、ビジネスの方はレコード会社や出版、マネージメントとディールとか、プロモーション会社とかそういうのを全部やって、ステージについては、ステージでのパフォーマンスについて全ての面をカバーするよ。自分の楽器とオーディエンス

をどう相互作用させるかとか、ショウの行かない方とか、どんな部分をショウに入れるかとかね。僕はこのうちの2つを担当するんだ。音楽のプロダクションとスタジオのテクニックっていうのと、ポップスの作曲だよ。

Q: すごい経験みたいですね。

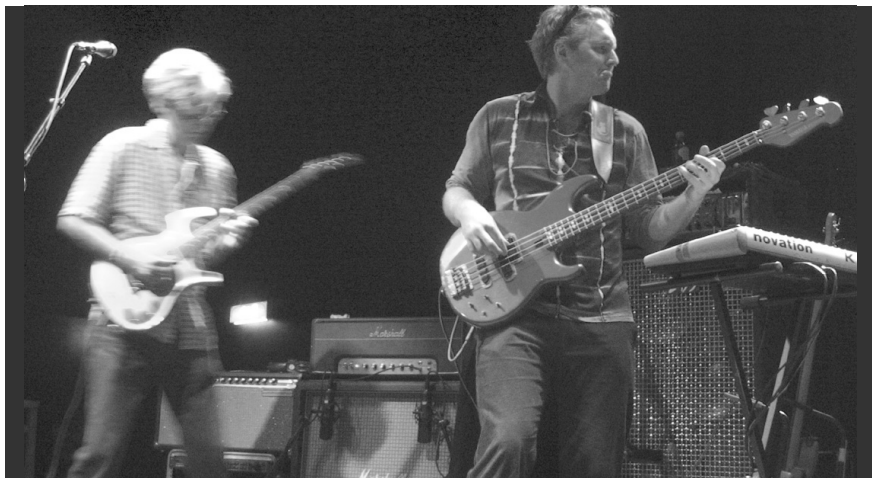
J: 僕自身がその大学に行ったから、在学中にそこで欠けていた物のいくつかを持ち帰る事ができるよ。自分にとってどうだったかまだ覚えているし、今は還元できる経験がある。大学では年寄りのろくでなしが沢山働いているのを知っているだろ？彼らは音楽業界にいるのがどんな事なのか、全

ミュージシャンであることは、良い先生になる完璧なミックスだと思うね。

Q: 1クラス何人なんですか？

J: 1学年30人ぐらいじゃないかと思う。状況によるけど。基準を設けなくちゃいけないから、誰もがこのコースに入れる訳じゃないんだ。このコースを取るには何かスキルがないといけないし、学生は一定のレベルを満たしている必要がある。入学試験があって、それはスウェーデンの他の大学と同様だよ。もしそうじゃなかったら、馬鹿な質問を受けるかもしれないね。ベースって何ですか？とかさ(笑)。

Q: THE TANGENTのツアーですが…。



くわかってないのさ。音楽を作るツールについては知っていて、もしピアノを弾くなら、こうであるべきだってリストとかメンデルスゾーンとかブラームスとかを弾いてね。この点ではものすごく良いんだけど、プロのミュージシャンでいるっていうのは、全く違う事なんだ。彼らは、本当はどうなのかっていう経験が欠けているんだよ。僕は自分のクラスに、セオリーと実際の業界での経験といういいコンビネーションを提供できると思うよ。プロの

J: この話をするには悪いタイミングだぞ。もうツアーに出て10日ぐらい経っていて、今、僕は家に帰って家族に会いたいんだ。来週の終わりに聞いてくれたら、楽しいものになるだろうって言うだろうね。僕らは今までAndyとSamと一緒に演ったことがないから、これも特別な経験になるだろうね。何を期待していいとか、どんな風になるのか、わからないんだ。それなりの人数が来るといいね。オランダと、イギリスでのフェスティバルには、大勢来ると思

う。今は、僕の妻のIngerが1人で2人の子供と家にいるから、とても大変なんだ。特にNoraはまだ3ヶ月だから。僕は今、マイナス評価なんだよ。まずKARMAKANICのツアーがあって、今TFKのツアーで、次にTHE TANGENTのツアー。彼女にとって、楽じゃないんだよ。(この後、女性の話に脱線して行ったが、Jonasの立場がさらに悪くなるといけないので、書かないでおく。肝心な点は、男はいつも板挟みになるということだ)

Q: TFKのツアーですが…。

J: とても上手くいっていると思うよ。今のところとても良いツアーだ。観客動員も良いし、オランダでは記録を更新したんだ。多くの人々が僕らのパフォーマンスを観たがっているというのは、インスピレーションを与えてくれるね。音楽面でも、セットを演奏するのに違ったアプローチをしたからとても良いよ。もしこれが正しい表現であるとすれば、よりプロフェッショナルにしようとしているってさ。ものすごく速く弾いたりインプロしたりして、誰かがしばらく喋っていて、「ここに來られて嬉しいよ、とか何とか。で、どの曲をやるんだっけ?」とか、そういったこと。TFKをオランダの013みたいなプロフェッショナルな環境で観るのは、今まで僕らを何度も観た人達にも良い事かもしれない。違うバンドみたいな感じだよ。|コアな部分に行って、他は飛ばそう」と言うのもとても得るところがあると思う。そう、インプロをするのも、ソロを弾くとかもとても好きだけど、人々がもっと構成がちゃんとしたショーを観てハッピーになっているのを見るのも、素晴らしい経験だ。良いショーだったよ。今回は個人が大事なんじゃなくて、バンドとプロダクション全体が大事なんだ。こういう事をするのは、僕らにとって良いことだし、何かその結果も見えだろう。わからないけど、ちょっと噂になると思う。へい、TFKのとっても良いショーに行ったよ。ライトとプロジェクターも使っ

ていたよ、ってね。ま、様子をみてみよう。

Q: カヴァー曲を演るのはどう思いますか?

J: 楽しいよ。前にもカヴァーを演ったことがあって、ファンクラブのショーでやったりしたよ。観客にはびっくりだし、それが目的だったんだ。皆に何かエクストラな物を、ってね。ショーの最後で"Speed King"を演って、君にとって最高の音楽の経験ではないかもしれないけど、2時間かっこつけた曲と、ライトとかもついて、全てがとてもコントロールされているように見えるものの中で、メンバーがリラックスするのを見るのは、観客にとって良いと思う。個人的には、曲が好きなんだ。THE BEATLESの曲はすごく良いし、DEEP PURPLEの曲もね。

Q: 今回殆どステージ後方にいるというのは、どんな感じですか?

J: 心理学みたいなものだよ。パフォーマーがある場所にて、同じ場所にいるんだけど、彼らが何か大事な事を言う時、彼らが前か横に動くのが見られる。後方に立っているっていうのは、とてもパワフルにもなるんだよ。だって、台から降りるとすぐ、ものすごい効果があるからね。とても良いプロの演説家を見れば、彼らが同じエリアを30分動いていて、何か本当に大事な事を言う時、彼らのスピーチの特定の場所を強調した時、彼らが注目を集める為に、それまでの場所からちょっと動くのがわかるよ。だから、心理学的にあそこにいるのはいいし、ヴィジュアル面でもね。

Q: 台の上でプレイするというのは、他のメンバーとのコミュニケーションも広がると思いますか?

J: うん、この方法でZoltanと僕はものすごくうまくコミュニケイトできるんだ。RoineとHasseの背中を見てるけど、それは問題ないよ。彼らはそんなにハンサムじゃないからさ(笑)。僕にとっては上手くいっているよ。上でプレイしていて、以前より女性客が増えたことに気がついたんだ。でも、Danielのせいかもしれない。僕のせいじゃないの